心田庵

しんでんあん

長崎県長崎市

茅葺屋根の母屋

東屋（あずまや）

茅葺門（内側）

和室から庭を望む

見どころ

心田庵は長崎の茶道において重視された経緯があり、天和２年（１６８２）の「心田菴記」や文化14年（１８１７）の「心田菴図」などの資料も残されている。江戸時代からの由緒ある日本庭園（池泉回遊式庭園）は春は新緑に、秋は紅葉に包まれ、風情がある景色と市内では非常に珍しい茅葺門、茅葺建物があり、皮の付いたままの木や丸太が柱として使用されていることなど、数寄屋造りの特徴を持っている。閑静な住宅地の路地裏に茅葺門だけが見てとれ、その奥にこのような広い敷地（約478坪）と茅葺建物が残されているとは想像しがたい。長崎市内に残る貴重な歴史的、文化的な遺産で、平成25年2月に長崎市の史跡に指定されている。

心田庵は、何兆晋（がちょうしん）が長崎片淵郷（現在の片淵2丁目）に建てた別荘である。何兆晋は何高材（がこうざい1598～1671年）の長男。父、何高材は帰化唐人であり日中貿易で財をなし、崇福寺大雄宝殿（国宝）をはじめ長崎の清水寺本堂（国指定重要文化財）を父子で寄進したことで知られている。また、石橋の寄進などにも尽力している。

何兆晋は万治（まんじ）元年（1658年）に唐小通事（とうこつうじ）となり、寛文8年（1668年）まで十年間つとめている。心田菴記の作者である長崎出身の儒学者、高玄岱（こうげんたい1649～1722年）は「およそこの心田庵は他と大いに異なり、奥深く穏やかな外観であり、拡がって隠れなく見える。この庵には、あらゆる所に細工を尽くしているが、肘掛けや敷物など贅沢なものはない。」「わずかな土地だが、心の田を子孫に残し耕させる余地があり、欠けるところはない。」「これはいわゆる心田と言うべきか。それゆえ、君の心田は千頃万頃（せんけいばんけい）の広さであり、まさに子が種をまき、孫が耕すのみなのであろう。」と記している。質素な中に心を豊かにする美しさが感じられると、心田庵の名の由来が語られている。江戸後期になると心田庵は唐通事をつとめた茶人、神代松蔭（くましろしょういん　1754～1833年）の別荘となり、しばしば茶事が催されていた。

茶室

茶室

表玄関

和室床の間（右奥は茶室）

日本庭園（池泉回遊式庭園）

建物名称	心田庵
建築年	寛文8年（1668年）推定
構造・様式	茅葺建物　木造平屋・数寄屋
所在地	長崎市片淵2丁目18番18号
電　話	095-829-1193（長崎市文化観光部文化財課）
Ｈ　Ｐ	http://www.city.nagasaki.lg.jp/
開館時間	一般公開　春・秋（各20日間ほど）9時～17時　有料
アクセス	心田庵入口バス停徒歩3分　新大工町電停徒歩10分
備　考	長崎市指定史跡 茅葺建物（和室・茶室）と庭園の貸出（申込必要）

湧水庭園　四明荘

ゆうすいていえん　しめいそう

長崎県島原市

庭から見た透明度の高い池と四明荘（写真：島原市提供）

池へ張り出した座敷から庭園を眺める

明治後期に伊東元三氏（当時開業医師）の別邸（宅地187.8坪、木造瓦葺約40坪）として建築され、四方の眺望に優れていることから「四明荘」と名付けられた。庭園は昭和初期に禅僧を招いて造られたと言われ、京都の庭園などの枯山水式庭園と対極にあるような湧水を生かした近代庭園である。透明度の高い美しい水に色とりどりの鯉が優雅に泳ぐ庭園の池へは一日に約3000トンもの清水が流れていて市民に親しまれてきた。座敷は正面と左側面の二方が池へ張り出して縁を廻しており、一段高い屋敷から庭園を見下ろすと座敷と庭園が一体となり、ここでしか見られない独特の美しい景観が広がる。

見どころ

正面の庭だけではなく、居室棟裏手には観賞式の池泉式庭園がある。その四角形の池には四つの中島があり表の庭園とはまた違った趣がある。澄んだ水の周りは低い石積で護岸され、池底はいずれも砂敷き、池の中には沢飛石が配置されている。くぐり門から一歩中に入るとピンと張りつめた静寂が当時にタイムスリップしたような感覚になる。入口付近には底まで見える程の透明度を誇る湧水口があり、こんこんと湧く様子を見ることができる。国の登録記念物、登録有形文化財となり、「鯉の泳ぐまち」の一角にある人気の観光スポットとなっている。

くぐり門（表）

くぐり門

入口付近にある底まで見える透明度を誇る湧水口

池で優雅に泳ぐ

座敷の床の

居室棟裏手にある観賞式の池泉式庭園

沸々と湧き出る美しい水に泳ぐ

島原半島は随所で水が湧き出ていて、上下水道や農業用水などほとんどを地下水でまかなっているほど湧水に恵まれた町である。特に半島の中央にある雲仙地溝内に特に湧水が多く、島原市街地では60ヶ所以上の地点から合計日量22万トンの湧水がある。島原市は水緑都市モデル地区に指定され、島原湧水群は「日本名水百選」「水の郷百選」にも選定されている。湧水群の多くは1972年の眉山崩壊後に出現したと伝えられる。この「四明荘」は島原市の中心街(鯉の泳ぐまち)にありながら静寂な佇まいをかもし出し、邸内にある池からは沸々と湧き出る大小の池が３つある。1日約3,000トンの湧水量を誇る池には鯉が泳ぎ、庭内には赤松や楓など色々な植栽が施されており、見るものすべてを魅了する。

建物名称	湧水庭園　四明荘
建築年	明治後期
構造・様式	木造平屋　数寄屋造り
所在地	長崎県島原市新町2丁目125番地
電　話	0957-63-1121
Ｈ　Ｐ	http://www.shimabaraonsen.com/
開館時間	9：00～18：00（休館日無） 入場料　大人300円　小人150円
アクセス	「商工会議所前」バス停　徒歩5分
備　考	国登録有形文化財

茶室「閑雲亭」

ちゃしつかんうんてい

長崎県平戸市

茶室閑雲亭全体の外観　（公）松浦史料博物館より提供

松浦史料博物館は昭和30年（1955）10月西海国立公園の指定と前後し、松浦家39代陞（すすむ）氏により資料等を寄贈され設立されました。建物は鶴ヶ峰邸と称して明治26年（1893）に建てられた当主の私邸であったものである。（県指定有形文化財）

茶室の内部　（公）松浦史料博物館より提供

見どころ

「閑雲亭」は主として千利休の創意に基づく純然たる草庵茶室である。従って建築の資材並びに方法は，農村庶民の質素な住居様式を取り入れ、殆ど自然の材料を似て構築されている。屋根は棟、梁、桁を除き全部竹材を用い、葭葺とし、軒柱は自然の丸太柱を組み合わせ、藁縄で固定し、ほとんど釘は使用していない。このように草庵様式ではあるが、亭の要素も完備した草庵茶室は稀である。その為に全国各地から大勢の観覧者やまた茶室研究の専門家が来訪し、調査研究するなどかなり世に知られたており、これからも慎重な維持管理が必要である。

茶室「閑雲亭」は元来明治26年（1893）、松浦家37代松浦詮（号・心月）は、御館跡に居を構えることを計画し、明治26年（1893）に竣工、鶴ヶ峰邸と名付けた。鶴ヶ峰邸の庭園一隅に自らの設計による茶室「閑雲亭」を建立した。しかし残念ながら昭和62年（8月の12号）の台風により倒壊した。現在の「閑雲亭」は昭和63年9月に佐賀市の宮大工宮路肇氏によって再建完。従来の萱葺を葭葺に替え、目に見えない箇所に台風に対する補強をしているが、他は忠実に復元している。床面積は19.83㎡あり、お茶とお菓子（平戸の名菓）を楽しむことができる。

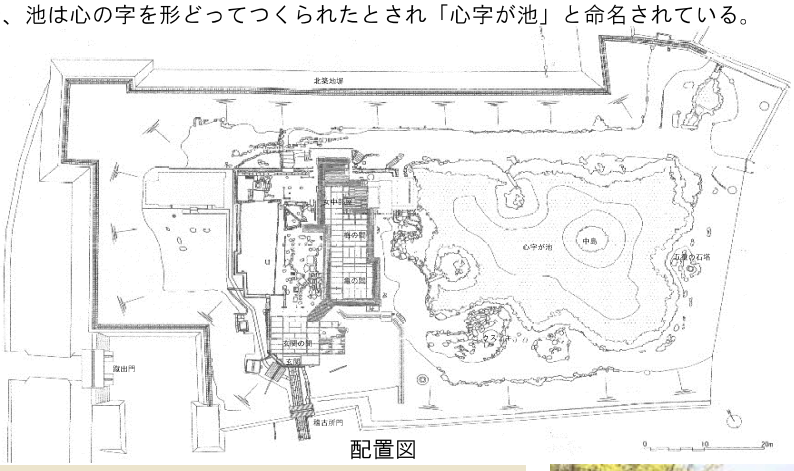
建物名称	茶室「閑雲亭」
建築年	1893年（明治26年）　昭和63年再
構造・様式	木造　庶民の質素な居住様式
所在地	長崎県平戸市鏡川町12番地
電　話	0950-22-2236
Ｈ　Ｐ	http://www.matsura.or.jp/
開館時間	9：30～17：00（12月29日～1月1日休館）
アクセス	平戸桟橋バス停より徒歩5分
備　考	国登録有形文化財

石田城五島氏庭園隠殿屋敷

長崎県五島市

いしだじょうごとうしていえんいんでんやしき

五島家第30代盛成は、福江城（石田城）の 工事が八分どおり竣工すると安政5年(1858) 1月21日、子息の盛徳に家督を譲って藩政を 辞し、城郭内にある隠殿として邸宅を建て、この東側に京都の僧、全正に庭園を作らせた。全正は金閣寺の丸池を模倣し、用い石は鬼岳の溶岩を多用した。盛成はことのほか亀を好んでいたので、池護岸、中島などの随所に亀似た石を据えているのが特徴で、池は心の字を形どってつくられたとされ「心字が池」と命名されている。



配置図

玄関

亀の間より庭園を眺める

見どころ

隠殿屋敷は、第35代当主典昭により、平成28年(2016)2月29日に修復工事が完了した。亀の間、梅の間、神様の間の表具・建具(現物は大変貴重なものであり、今後の経年・活用によってこれ以上破損することを防ぐ意味で、別途保管されている)は既存に倣い、本紙複製、張り直しが行われているが、版木を制作して刷り込んで製作されたものである。

亀の間の唐紙と釘隠し

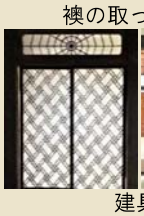
梅の間の唐紙と釘隠し

南化粧部屋の建具

女中部屋からの見通し

襖の取っ手

屋敷内の井戸



建具

石灯篭

樹齢800年を経たクスノキ（パワースポット）と隠殿屋敷外観

亀の間

15畳敷で北側にトコとトコ脇を並べ、トコ柱はカリンの曲柱、地板はケヤキの1枚板を使用する。トコの東側は地板を上げ、その上部には吊束に竹状落掛を差して北東面に障子を建込み独特の書院とし、トコ脇では天袋吊る。公的な接客に使用されたと思われる。

梅の間

8畳敷で、北側にトコとトコ脇を並べ、「亀の間」と同様にするが、落掛けはアーチ状に拵え「仏間」とは続き間とし、当主の居間として使われたものと思われる。腰壁障子の桟組を丁字崩し、書院欄間の桟組は万字組子とする。間仕切り欄間は黒漆縁に万字入梅紋。

建物名称	石田城五島氏庭園隠殿屋敷
建築年	1861年（文久元年）
構造・様式	木造２階建て・書院造り
所在地	五島市池田町1-7（無料駐車場８台可）
電　話	0959-72-3519
Ｈ　Ｐ	なし
開館時間	9：00～17：00（毎週火曜日・水曜日休園）
アクセス	福江港より徒歩10分。福江空港より車で10分。
備　考	国指定名勝

旧早川家住宅

きゅうはやかわけじゅうたく

長崎県諫早市

写真：諫早市公式HPより

見どころ

外観

２階天井

写真：諫早市公式HPより

外壁

１階天井

縁側

写真：諫早市公式HPより

式台

畳敷き

座敷

違い棚

縁側

写真：諫早市公式HPより

旧早川家住宅は、明治7（1874）年に元諫早家家臣の木下助内氏が自邸として建設し、その後、長男の元衆議院議員木下吉之丞氏をはじめ、代々子孫が住んでいた。また、同氏の娘婿早川員氏が入居され第９代諫早市長を務めたため「市長邸」の愛称で親しまれている。

外観（座敷側より）

建物は木造２階建で、２階の大屋根は寄せ棟の茅葺を、その周囲にとりつく１階の下屋部分は瓦葺になっている。大屋根の小屋組は扠首組で伝統的な構法を示している。外壁は真壁造で、上部露出部を漆喰塗り仕上げとし、腰壁は目板打ちつけの縦板張りになっている。

床面積は１階が191.26㎡，２階が78.48㎡の計269.74㎡（約82坪）と規模が大きく、また近世の武家住宅に特有な玄関である式台を構え、違い棚、付書院、仏間を配した座敷の間と、これに付随した客用の便所を持っている。全体に土間部分が少なく、建設当初から室内のほとんどを畳敷きにしている。農家系統の民家でありながら、格式を重んじる武家住宅に近い様相を見ることができる。明治以降の建設だが、その建築様式のあり方は旧藩時代の上級農家や庄屋クラスの形態をよく伝えている。

建物名称	旧早川家住宅
建築年	1874年（明治7年）
構造・様式	木造２階建
所在地	長崎県諫早市小野島町2233-7（干拓の里）
電　話	0957-24-6776
Ｈ　Ｐ	http://www.kantakunosato.co.jp/
開館時間	9：30～17：00（入館16：00まで） 休館日：月曜日（祝日の場合翌日）12/30～1/1
アクセス	県営バス「干拓の里」前　駐車場あり
備　考	諫早市指定有形文化財

旧楠本正隆屋敷

長崎県大村市

きゅうくすもとまさたかやしき

主屋正面

庭園、離れ側面

見どころ

1.5間の式台玄関の奥に15帖の座敷があり、西側に1.5間の床の間と1間の付書院が並び、床の間と直角に違い棚を設け、独特な座敷飾りを構成している。庭に面しては矩折に畳敷きの縁側を設け、土庇には濡縁を同様に付設している。

式台玄関から座敷を眺める

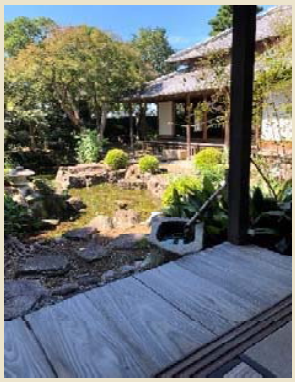
座敷廻りの土庇

座敷飾り

欄間…北と南は組子を斜めにいれた珍しい意匠

釘隠し

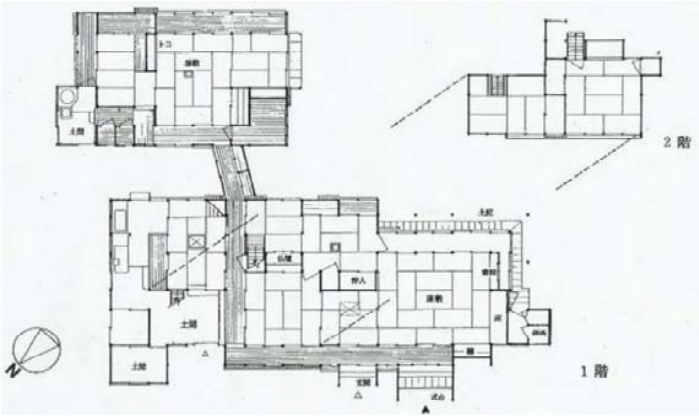
取手



斜めの渡り廊下で結ばれた離れは10帖の座敷を中心にして専用の便所と風呂をもつ独立した生活空間を形成している。

離れから座敷･庭園を眺める

楠本正隆は尊王攘夷を掲げた大村藩三十七士の一人で、明治維新後は明治５年に新潟県令、同１０年に東京府知事、同２６年に衆議院議長を務めた。
この屋敷は楠本正隆によりに建てられもので、通りに沿って築かれた石垣よりもやや高い位置に寄棟造り、桟瓦葺き、平屋建て一部２階の主屋と渡り廊下で結ばれた別棟の離れが並び建っている。主屋は棟札から明治３年建設と解り、伝承では市内の深澤家の屋敷の材料を用いて建てられたといわれている。建設されたのは明治初期であるが、大村の近世武家住宅の典型的な形式を伝えている。
平成4年3月に大村市の史跡に指定されると同時に、以後全面的な修理・整備工事が施された。庭は従時の池泉回遊式に復元されている。



平面図（『城下町・大村と武家屋敷通り』より）

主屋、土間上部梁組

食堂の隅に設けられた棚

建物名称	旧楠本正隆屋敷
建築年	(主屋)明治3年　(離れ)明治前期
構造・様式	(主屋)木造平屋一部2階、寄棟造、桟瓦葺 (離れ)木造平屋、寄棟造、桟瓦葺
所在地	長崎県大村市玖島2丁目291番地4
電　話	0957-52-9885
Ｈ　Ｐ	なし
開館時間	9：00～17：00（月曜日・年末年始休館）
アクセス	大村ICより車で15分（駐車場有）
備　考	長崎県指定有形文化財、大村市指定史跡 入場料　高校生以上200円、小中学生100円

合資会社　猪原金物店

長崎県島原市

ごうしがいしゃ　いのはらかなものてん

表が金物店、手前が茶房とギャラリー「速魚川」

店舗側面と鏝絵

見どころ

環境庁より「名水百選」に選ばれた島原の湧水であるが、国内の四大名水（北海道の羊蹄山の湧水、神戸の六甲山の湧水、屋久島の縄文水、島原の湧水）にも入っている。平成10年に敷地内の湧水を利用して作った人工の川「速魚川」がある。このような街なかの湧水を利用したビオトープは少しづつではあるが、その活動の輪を広げつつある。中庭はどの部屋からも見える何かほっとする空間であり、喫茶やギャラリーでは静かな時間が流れる。喫茶では湧水を使った寒ざらしやコーヒー等がある。またかつての住居部分の２階座敷では展示会なども多く利用されている。

湧水の流れるビオトープ速魚川

展示会などがある２階座敷

店先に多くの商品が並ぶ

「速魚川」から中庭を望む

１階和室のガラス戸と格子窓

江戸時代後期の商家で、北に島原城を望む由緒ある島原街道に面するこの地に明治10年（1877年）金物店として創業し、現在に至っている。金物店としては九州で2番目に歴史の長い老舗であり、とても趣のある町屋造りの建物で、店舗正面と側面の漆喰壁には龍の鏝絵（こてえ）、店舗脇の水汲み場には龍の石彫がある。平成15年（2003年）には国の登録有形文化財になった。

平成の普賢岳噴火後は、昔ながらの金物店を大改装し幕末の町屋を復元してお店の奥に茶房とギャラリー「速魚川」（はやめがわ）を併設し、さらにお店の横に井戸の湧水を利用した人口の小さな川「速魚川」を生み出した。ここには突き井戸（地下110メートル）から自噴する毎分150リットルの湧き水が流れている。自由に飲んだり持ち帰ったり出来るのでこの湧水を求めて、遠くは福岡や佐賀、長崎、諫早、大村、そして島原半島のあらゆる所から毎日多くの来客がある。

速魚川にかかる小さな石橋を渡って建物の中へ入ると、坪庭を囲むように昔ながらの囲炉裏の間やテラスがあり、渡り廊下、土間など懐かしくて安らげる空間が広がっている。茶房では、湧水と自然食材を使った美味しい料理を楽しむことができ、２階のギャラリーでは、全国様々な分野の作家の展示会、演奏家や歌手によるコンサートなどが開かれ、ギャラリーのもつ歴史的な空間との絶妙な調和が好評を得ている。また、金物店では国内外のロングセラーからチタン製の最新商品まで品質本位で選んだ金物類や明治から昭和の珍しい商品ストックも多数あり展示販売している。最近では幅広い世代の要望にも応えられるようなものも揃えてあり、明治から令和へと引き継がれている。

基本理念は「こだわって本物、使って一生モノ」。

猪原金物店屋号。明治初期、吉備の国（岡山）から島原に移住し創業した初代猪原信平考案。吉備の「吉」を使用。

数千あると思われる金物類が並ぶ店内

建物名称	合資会社　猪原金物店
建築年	1861年（万延2年）
構造・様式	木造2階建　町屋造り
所在地	長崎県島原市上の町912番地
電　話	0957-62-3117
Ｈ　Ｐ	http://www.inohara.jp
開館時間	金物店　9：30～18：00（毎週水曜日休業日） 入場料　無料（喫茶・食事は有料）
アクセス	島原鉄道島原駅より徒歩3分
備　考	登録有形文化財（国）、景観資産登録（県）